

ロシア文学史

マーク・スローニム

池田健太郎 訳

新潮社版

‘THE EPIC OF RUSSIAN LITERATURE’
‘FROM CHEKHOV TO THE REVOLUTION’

By MARC SLONIM

Japanese translation rights arranged with Dr. Marc Slonim,
Geneva through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.



ぶんがくし
ロシア文学史

マーク・スローニム

いけだけんたろう
池田健太郎訳

印刷 1976. 5. 25 発行 1976. 5. 30

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 〒162/東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808

電話 業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411

セット定価 5800円

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

©1976 Kentarō Ikeda

Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ロシア文学史◇目次

訳者はしがき	10
--------	----

序 章 起原	15
--------	----

古代の口碑・伝承文学——宗教文学と世俗文学——タタール族の侵入——モスクワ文学の擡頭——十七世紀——アヴァクームの『自伝』——詩形の革新——ピョートル大帝の改革——トレジャコフスキイ、ロモノーソフの詩——劇作家スマローコフ	
---	--

第一章 十八世紀の詩人、劇作家および諷刺作家	39
------------------------	----

宮廷のフランス心酔——文化の復興——宮廷詩人デルジャールヴィン——諷刺精神——ロシア演劇の展望——フォンヴィージンの喜劇——フランス革命の余波——急進文学の祖ラジョーシチェフ——十八世紀文学の特質——文学の世俗化——文学のヨーロッパ化——民間伝承の再認識	
---	--

第二章 新しい時代	57
-----------	----

第三章

感情主義の洗礼——カラムジーン——ロシアの前期ロマン派——名
訳者ジュコフスキイ——詩壇のギリシア趣味——バーチュシコフ
——グネージチ——民衆文学の礎石——クルイローフの寓話詩

ナポレオン侵入からデカブリストまで……………71

自由主義と反動政治——独裁官アラクチェーエフ——グリボエード
フ、喜劇『知恵の悲しみ』——秘密結社——デカブリストの蜂起と失
敗——ルイレーエフらの政治詩

第四章

プーシキン……………85

プーシキン詩の平明と自然さ——民衆詩の摂取——『ルスランとリ
ュドミィラ』——抒情詩、あふれる生命感——『エヴゲーニイ・オネ
ーギン』——バイロンの影響とその揚棄——写実小説の黎明——『ジ
プシーたち』——自由の精神——古典性とロマン性——ピョートル
大帝への敬愛——『青銅の騎士』——『ボリス・ゴドゥノフ』——
歴史への興味——国民的自覚——その生涯——官憲との悶着、結婚、

決闘——プーシキンの位置

第五章

レールモントフ……………III

『詩人の死』の悶着——複雑な生いたち——孤独と叛逆の精神——二度の追放——悪魔的イメージ——『現代の英雄』——レールモントフの詩の特色

第六章

夢想家と哲学者……………126

反動のあらし——愚劣な検閲制度——プーシキン詩派——詩人バラトインスキイ——ヤズィコフ——三、四〇年代の文芸——哲学と夢想——ベリンスキイ——文芸批評の確立

第七章

西欧派とスラヴ派……………145

チャアダーエフの『哲学書簡』——スラヴ派、西欧派の綱領——急進的ジャーナリスト、ゲルツェン——新聞「鐘」の発行——ゲルツェンの社会主義

第八章

ゴーゴリ 160

第九章

批判的リアリズム

生いたち——『ディカニカ近郷夜話』の妖怪趣味——凡俗さへの恐怖
（『ミルゴロド』）——人生の落伍者への興味（『外套』）——写実と幻想——社会諷刺劇『檢察官』——芸術家と惡の描写の問題（『肖像画』）
——『死せる魂』——抒情味と社会惡の暴露——作者の懺悔

——ゴンチャローフとオストロフスキ 182

写実派の勝利——ゴンチャローフ——『平凡物語』——『オプローモフ』のタイプ——族長制的な生活様式の告発——『断崖』——『川向こう』の商人階級——オストロフスキ——戯曲における写実主義——『小暴君』^{サモドゥール}の描出——『雷雨』——国民劇の確立

第一〇章

批評家と否定主義者 202

農奴制度の廃止とその余波——学芸の興隆——知識階級の分裂——

《父と子》の争い——チエルヌイシェフスキイ——芸術の社会的意義
——小説『何をなすべきか』——ドブロリユーボフ——社会学的文芸
批評——ビーサレフの否定主義^{ニヒリズム}——芸術無用論——ロシア・ニヒリ
ズムの特徴

第二章 一八六〇年代の文学的傾向……………217

文学の政治化——リアリズムの勝利——アクサーコフ——スホヴォ
ーコブイリンの怪奇劇——《コジマー・プルトコフ》の諷刺——
社会小説の隆盛——雑階級作家、ボミャローフスキイ、レシェー
ニコフ、詩人ニキーチン——ビーセムスキイのリアリズム——純粹
芸術派——詩人グリゴリエフ

第二章 ネクラースフ、チュツチエフ、

その他の群小詩人たち……………229

ネクラースフ——その生いたち——民衆の《悲しみと苦しみ》の詩人
——市民詩の発展——純粹詩派、マリーコフ、シチエルビーナ、メ

第二三章

イ——貴族詩人A・K・トルストイの活躍——哲學詩人チュツチュフ、宇宙意識、混沌の探究

ツルゲーネフ……………248

西欧における人氣——『獵人日記』の諸作——簡潔な文体——《余計者》の形象——『ルージン』——『貴族の巢』——『その前夜』——『父と子』の論争——『煙』——『処女地』——その芸術觀——人生への態度——厭世思想——『散文詩』——女性觀——作品に現われた女性像

第一四章

ドストエフスキイ……………269

生いたち——シベリア流刑——帰国後の文学活動——初期の小説、『貧しき人びと』他——中期の作品、『死の家の記録』『虐げられた人びと』『地下室の手記』『賭博者』『罪と罰』——後期の作品、『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』——矛盾と二元性——ロシアの使命——小説の構成——ロマン主義の要素——文章の特徴——作品の複雑な面——ロシアにおけるドストエフスキイの人氣の変遷

第一十五章

レフ・トルストイ……………305

生いたち——自然観と異常な生命力——作品の自伝的要素——『戦争と平和』の意義——『戦争と平和』の道德的な面——文体の自然主義——『アンナ・カレニナ』とその思想——『わが懺悔』——思想的危機——原始キリスト教思想——芸術の放棄——後期の小説——家庭生活——『クロイツェル・ソナタ』——性の放棄——社会の放棄——『復活』——トルストイの意義

第十六章

人民派の運動……………341

農奴解放後の情勢——ラヴロフ——バクーニン——人民主義運動の歴史的意義——「民衆の中へ」——人民派の分裂——テロの横行——ポベドノースツェフの反動政策——一八八〇年代の雰囲気——レオンチエフ——諸派の変貌——プレハーノフ——ミハイロフスキイ

第十七章

ウスペンスキイ、ガルシン、シチエドリーン、他……………359

第一八章

一八八〇年代の群小作家たち——ウスペンスキイ——ガルシン『赤い花』他——ナードソンの詩——サルティコフシチエドリ——『ゴロヴリョーフ家の人びと』——諷刺的諸作

374

第一九章

土の作家と貴族詩人たち……………
——メーリニコフの仕事——地方色の濃化——マールミンシビリヤーク——レスコーフ、民衆観察の才——一八八〇年代の詩壇——抒情詩人フエート

387

チエーホフ……………
生涯と創作態度——初期短篇とユーモア——生の瑣末事の描写——『憂鬱な人びと』——『決闘』——孤独——『六号室』——『百姓たち』——よりよい生活への憧憬——芸術の目的——描写の方法——戯曲とその特異な作劇術——チエーホフの意義

作品索引

419

人名索引

429

訳者はしがき

この本は、もと故神西清先生とわたくしとの共訳として、昭和三十二年、三十三年に新潮社から出版されたM・スローニム著『ロシア文学史』および『ソビエト文学史』を全面改訂して成った訳書である。今回、改訂版を作るにあたって、二、三、断わっておくべきことがあるので、左に示す。

まず第一に、原著者の指示によって、翻訳の底本に新しいテキストを使用したことである。すなわちスローニム氏が、わたくしどもの旧訳の底本となったロシア文学史の仕事——“The Epic of Russian Literature”、“Modern Russian Literature”——を發表されたのは、昭和二十五年および二十八年のことであるが、その後、氏は十年あまりを経て大幅な改訂と増補を行なわれた。とりわけ十月革命後、ソビエト文学を扱う諸章においてはむしろ、新たに書き替えられて、“Soviet Russian Literature”という一書となったほどである。今回の改訂においては、当然、最新版によって原著者の改訂・増補が採り入れられている。

第二には、ソビエト文学を扱う諸章の翻訳を、新たに一橋大学教授、中村喜和氏にお願いしたことである。わたくしの旧訳は、古いテキストによっており、原著者の書き足しも多いので、新規な翻訳の必要を感じたためである。中村氏にはまた、全般にわたって校閲をお願いし、索引の作成までを承引していただいたほか、『ソビエト文学史』の巻末には原著者スローニム氏の紹介を中心に解説をお願いした。なお、中村氏の努力によって、スローニム氏から原書になかった新たな章を得たことも特記しておかねばならない。その章は、補章として訳書に掲げられているが、そこではソルジェニーツイン問題およびソルジェニーツインの著作、それにいわゆる第三次亡命時代の作家たちが、昭和五十年、すなわち一九七五年の時点に至るまで鳥瞰されている。

第三に断わっておかねばならないことは、この改訳を機会に、神西清先生のお名前を削ったことである。二十年前、旧訳を手がけていたころ、わたくしはまだ学生であった。ところが、神西先生が病気で亡くなられたために、わたくしの未熟な訳文を先生に校閲していただく機会が永遠に失われてしまった。以来、神西清の名をこの

訳書に掲げながら、そのことが名訳者であった先生のお名前を汚しはせぬかと、深く心に怖れてきたのである。さいわい改訳の機会を得たので、ご遺族のお許しを得て、神西先生のお名前を訳書から削らせていただいた。次に、旧訳の場合と同様に、スローニム氏とのあいだに幾たびかの手紙の往復が行なわれたが、氏から日本の読者への言葉をいただいたので、中村氏の翻訳によって左に掲げる。この一文から、スローニム氏の日本蟲眞がよく知られるだろうと思う。

日本の読者への言葉

わたしのロシア・ソビエト文学史が日本語であられることは、いくつかの理由からわたしにとってとくに喜ばしいことです。

まず第一に、わたしは日本という国を直接知っています。一九一九年（大正八年）、まだごく若い頃にはじめて日本をおとずれ、一度に心を奪われてしまいました。ウラジオストクから船で北海道にむかう前に日本語の単語を四、五十暗記したのですが、いざ実際に使ってみると、たどたどしいこちらの片言に対して、戻ってくるのはどっと堰をきったような能弁というわけで、結局何一つわからず、すっかりまごついてしまいました。わたしの無駄な骨折りはみんなから笑われるだけで、通訳の話によると、わたしの本当にしゃべれる日本語はコンニチワとコンバンワの二つだけだということでした。しかしわたしの舌はこうして自由がきかなかったものの、眼のほうはしっかりと見開いていました。

ロシアにいるときから日本の美しさはさんざん聞かされていきましたので、わたしは横浜に上陸するとまっすぐ京都にむかい、そこで一週間ほど妙法院や二条城をはじめ神社仏閣を見て過ごしました。おかげでこの古都の魅力が生涯わたしの記憶にふかく刻みこまれることになったのです。

それから大阪、神戸、名古屋のような近代的な大都会をまわり、奈良で休養してから、最後の二カ月は東京で送ることになりました。東京では芝居見物などよりも、日本人の暮らし方や習慣になじむのが目的でした。そこで帝国ホテルを引きはらって、日本風の下宿に移りさえしました。下宿では身ぶり手まねをさかんに使い、生まれてはじめて昆布や刺身も食べてみました。外国語を話す何人かの日本の文学者に会う機会にも恵まれました。そのころは今とちがって、ドイツ語がよく話されていました。魅力的な女流詩人、与謝野晶子とも知合いました。

彼女はわたしのために、自分は冷たい水にただようことを運命づけられた燃える油である、という意味の短歌を色紙に書いてくれたものです。

日本に滞在したおかげで、わたしは日本美術を心から愛するようになり、今だにその気持は変わりません。わたしはかつてアメリカに住み、一九六二年以降はスイスに移りましたが、わたしの家をおとずれる多くの人たちは、書斎の一方の壁が広重や北斎や歌麿のものと浮世絵で飾られているのを見て驚いています。ほかの部屋には、日本の現代画家たちの作品をかけています。

そればかりでなく、わたしは日本文学にもふかい関心があります。もちろん翻訳によってですが、藤原氏の時代から武家の時代にいたるまでの古典、さらには明治時代の作品もかなり読みましたし、現代作家の小説も愛読しています。言うまでもなく、川端康成は、ノーベル賞を与えられるずっと以前から、その作品を読んで高く評価していました。谷崎、三島その他の作家たちも知っています。日本映画は決して見逃しませんし、歌舞伎が時おりアメリカやヨーロッパで公演を行なうときには、かならず観劇に出かけています。

わたしはさまざまな民族のあいだの相互理解が、たがいの文学を知り合うことによっていちじるしく深められ、促進されるものと信じています。わたしが長い年月をかけて研究し執筆した文学史の日本語訳が、ロシアと日本という隣り合った民族のあいだの、とりわけ若い世代間の文化的な結びつきを強めることに役立つとすれば、それは崇高な目的に対してささやかながらも貢献したことになろうかと思えます。

一九七五年十一月

マーク・スローニム

最後になったが、この本の出版にあたってひとかたならぬお世話をいただいた出版部の沼田六平大、杉野加代子の両氏、および種々親身な指摘をいただいた校閲部の中島享氏に、心からの感謝を捧げたいと思う。

昭和五十一年春

池田健太郎

ロシア文学史

担当訳者 池田健太郎

The Epic of Russian Literature
From Chekhov to the Revolution (1~4)